



生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）に向けて

地球上では多くの生きものがお互いにかかわりを持ち、バランスを保って生命を育んでいます。私たちは、その生きもののつながりの中で生活を営んでいます。しかしながら、今、その生きもののつながり、すなわち生物多様性が、危機的状況に陥っています。このため、その問題について国際的に話し合う「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」が平成22年10月に名古屋で開催されます。

本号はCOP10の特集号として、COP10に向けて生物多様性センターが行っている里山里海サブグローバル評価などを紹介します。

里山里海の恵みを守るために （ちばの里山里海SGA）

本田 裕子：千葉県生物多様性センター

私たちの生活は、食べ物、きれいな水や空気、さらには文化に至るまで、生物多様性と密接に関連しています。来年10月には生物多様性の保全について話し合われる国際会議（COP10）が愛知県で開催されます（詳細は3ページ参照）。

私たち人間の利用管理によって多くの生きものを育ててきた里山里海は、「生物多様性の宝庫」といわれ、自然と調和した暮らしの歴史があります。里山里海の価値を評価することを通じて、生物多様性保全に向けた持続可能な社会づくりに活かしていきたいと考えています。

里山里海とは

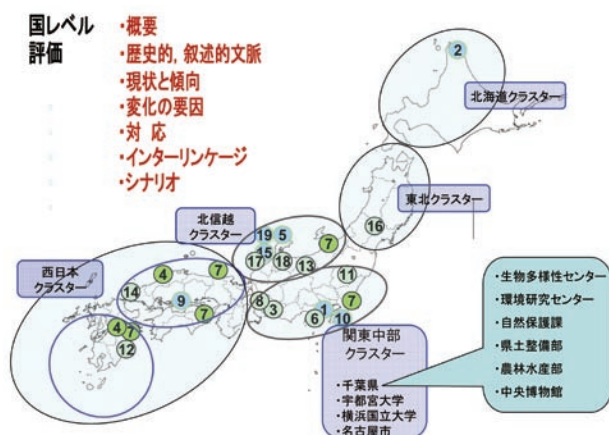
「里山」は江戸時代の林政史料にしばしば登場する言葉ですが、「奥山」や「深山」に対して、人里近くの土地、また人々の生活に農用林として利用された二次林を意味します。

そもそも「里」という言葉は、「田」と「土」から成り立ちます。田は、整理された生産地の象形、土は土地神をまつる「ほこら」の象形です（『新漢語林』より）。すなわち、里とは、「田地・土地神の『ほこら』のあるところ」を意味し、自然のなかでの人々の豊かな暮らしへの願いとそれを通じて形成された土地の姿を示す言葉といえます。

現在、都市化や過疎化によって多くの森林・林地が荒れ、また消失していく中、私たち人間の利用管



里山風景の一つである谷津田（撮影地：印旛村）



理によって多くの生きものを育んできた、里山の重要性が全国各地で認識されるようになりました。その結果、里山の意味が、近世から里山の範囲とされてきた二次林に限定せず、集落・田畑などの農村景観に拡大してきました。また、海や沼、川、湖など、里山同様に人々の暮らしに密接に関わり、持続的に利用管理されてきた自然豊かな環境を、里海、里沼、里川、里湖と呼ぶ動きがあります。ここでは総称して「里山里海」と呼びます。

また、里山は日本の特殊な事例ではなく、特にアジア諸国に広く通じる考え方として海外へ発信するために、英語表記する流れもあります。環境省は、「自然との共生の智慧と伝統を発展・活用すること」を“SATOYAMAイニシアティブ”と名づけて世界へ発信・提案しています。

里山里海の評価（「里山里海SGA」）

国連大学高等研究所が、COP10に向けて「日本における里山里海のサブグローバル評価（里山里海SGA）」を実施しています。里山里海が私たち人間の暮らしにどのように関わってきたのか、どのような恵みをもたらしてきたのか、里山里海が私たちの暮らしにもたらす様々な便益や機能（里山里海SGAでは「生態系サービス」と呼んでいます）の現状と傾向の分析、変化の要因の特定、将来の予測を行なって、里山

里海の持続可能な利用に向けてどのような政策や行動をとるべきか、を提言することが目的です。この評価では、日本を北海道、東北、関東・中部、北信越、西日本の5つのクラスターに区分して作業を進め、最終的に日本全体の傾向と変化を把握し、将来の予測を行なうことになっています。

里山里海SGAにおいて、千葉県はモデルサイトの一つであり、里山里海のモデル的な評価の実施を担当しています。千葉県内の里山里海の評価は、関東中部クラスターの里山里海の評価にも反映されることになっています。関東中部クラスター内には、東京や横浜、名古屋といった大都市があることから、里山里海を、都市化との関係から分析・評価し、課題を整理しています。里山里海の保全・再生とともに都市と里山里海の両立を目指した、私たち人間社会の将来シナリオを作成することを目指しています。

里山里海SGAに向けた千葉県の取り組み

千葉県では、里山里海の評価を行うためのプロジェクトチームを立ち上げています。プロジェクトチームは、生物多様性センターをはじめ、環境生活部、県環境研究センター、県立中央博物館、また、農林水産部や県土整備部の職員も参加した部局横断的な構成となっています。このような千葉県内の里山里海の評価は、今後の里山里海に関する施策に活かすとともに、里山里海の豊かさとその重要性の理解につなげられるものにしていきたいと考えています。



自然への信仰文化を育んできた里海風景の一つ（撮影地：勝浦市）

COP10（Conference Of Parties）に向けて

音谷 紗絵：千葉県環境生活部自然保護課

約190カ国が締結している生物多様性条約の10回目の締約国会議（COP）が2010年10月に名古屋で開催されます。この会議が日本で開催されることには、どのような意義があるのでしょうか。

生物多様性条約とは

生物多様性条約は、生物の多様性の世界的かつ急速な減少を危惧して、1992年のリオの地球サミットで採択されました。その当時、ワシントン条約（絶滅危惧種の取引に関する条約）やラムサール条約（湿地に関する条約）、ボン条約（渡り鳥などに関する条約）など、様々な環境に関する国際条約が既にありました。しかしながら、これらの条約は、特定の地域や特定の生物などを対象にしており、種間や地域的なつながりを持つ生物多様性の保全のためには十分でなかったため、包括的な条約として生物多様性条約が生まれました。さらに、条約では、“生物資源の持続可能な利用”や“遺伝子資源から得られる利益の公平かつ公正な分配”を目的に掲げ、社会的・経済的な要因も含めています。すなわち、生物多様性条約は、自然・社



生物多様性普及のための特大ポスター（COP9 会場）

会・経済に関係した幅広い分野を対象にした国際的な環境の基本法といえます。

COP10に向けた課題

では、COP10では具体的にどのような課題が話し合われるのでしょうか。2010年は、“生物多様性の損失速度を顕著に減少させる”といういわゆる2010年目標の達成年です。そのため、この目標達成の評価と新たな目標の設定が求められています。さらには、ABS（遺伝子資源へのアクセスと利益分配）の国際制度の整備、SATOYAMAイニシアティブ、海洋保護区や森林保全、バイオ燃料、農業、企業や地方自治体の参画なども話し合われます。

しかしながら、このように様々な議題が話し合われる条約にも関わらず知名度が低く、“生物多様性”という言葉自体も世間には浸透していません。環境省のアンケート調査（平成19年度）によると、この言葉を“聞いたことがない”との回答が5割を超えています。一方、生物多様性の双子の条約と呼ばれ同じ年に採択された気候変動枠組み条約が扱っている温暖化問題に対しては、関心があるという回答が9割を超えています。この関心の高さにより、企業はCO₂排出の少ない商品の開発に力を入れ、市民はそのような商品を選択する動きや、エアコンの設定温度を下げるなど自らの行動も始まり、国、地方自治体、企業、市民が一体となった活動が広がりつつあります。生物多様性条約もこのような官民一体となった動きを必要としています。

国際生物多様性年（2010年）に日本で開催されるCOP10は、生物多様性を普及させる絶好の機会です。現在、COP10の開催に向けて、県立中央博物館において生物多様性の企画展を開催し、普及・啓発を行っています。私たちの生活に不可欠な生物多様性の保全を目的にしている生物多様性条約の成功は、私たちの豊かな未来に繋がります。COP10を盛り上げて、生物多様性を普及させていきましょう。

千葉県の希少種（千葉県レッドデータブックから）



ミヤコタナゴ雄
撮影：2008年6月 鶴岡久光

⑥ミヤコタナゴ（コイ科）
〈最重要保護生物A〉

小さな淡水魚「たなご」の仲間は、その多くがきれいな婚姻色を持ち、昔から多くの人たちに愛されているほか、淡水二枚貝の中に卵を産むなど特徴的な生態を持ち合わせています。その中でも本種ミヤコタナゴは、関東地方にだけ分布している日本固有種ですが、現在は絶滅の危機に瀕しており、自然の生息地は千葉県と栃木県にわずかに残されているのみです。千葉県では、生息地域の市町村により生息水路の環境保全等が行われているほか、研究機関等により生息水域毎の系統保存が図られています。

今年（2009年）は、ミヤコタナゴが発見されてからちょうど100周年にあたります。発見以来わずか100年の間に絶滅の危機に瀕してしまったこの小さな淡水魚がいつまでも生息できるように、関係者による取組みが行われています。（尾崎真澄：千葉県生物多様性センター）

生命のにぎわい調査団 研修会を開催しました。

柴田るり子：千葉県生物多様性センター

調査団の現地研修会を「市原市市民の森」で5月30日に開催し、団員等総勢52名が、雨模様の空に負けない心意気で参加しました。初夏の生き物（夏鳥、水辺の生き物）の見分け力アップがテーマで、希少なモリアオガエルの樹上での産卵光景や泡の卵塊は、初めて見た団員が多く、とても感激されていました。

管理事務所の許可を得て、団員たちが、山辺の水路ではヤマアカガエル等のオタマジャクシや水生昆虫（カワゲラやトンボの幼虫）を網で捕らえ、図鑑と実物を見比べてじっくり観察しました。イトトンボのヤゴは、細長い体の腹部の先の尾鰭（びさい）



の形状が種により異なるので、参加者の興味を引いていました。

カエルの体色が種により異なるのは、生息環境（樹上、土の上、河原）の違いによることや、オタマジャクシが数多くいて、他の生き物の餌となり食物連鎖を支えている様子が実感できました。これからも、生き物とその生息環境を知る・考えることから生物多様性の保全・復元につなげていきたいと考えています。

千葉県の外来種



②アメリカザリガニ
(アメリカザリガニ科)

写真 駒井智幸（千葉県立中央博物館）

アメリカザリガニは、北アメリカ南部原産のザリガニです。日本には食用のウシガエルの餌として、1927年に鎌倉市に持ち込まれて以降、全国的に分布が拡大しました。成体は体色が真っ赤になりますが、若い個体は茶褐色です。しばしば、この茶褐色の個体が在来種のザリガニと混同されることがありますが、少なくとも関東以南に在来種のザリガニは生息していないので、この地域に見られるザリガニは全て外来種です。アメリカザリガニは、移入時期が古いこともあり、水辺の馴染みの顔になってしまっている感もありますが、本来の日本の水辺の生態系に大きな被害を与え続けており、在来種の希少生物の保護上、問題となっています。千葉県生物多様性センターでは、アメリカザリガニの拡大を少しでも食い止めるための啓発活動を行っています。（柳研介：千葉県生物多様性センター）

お知らせ

企画展 生物多様性1：いのちの生命のにぎわいとつながり
虫、魚、鳥、・・草、木、・・・人
その素晴らしさを、親から子へ、そして孫へ
開催期間 7月4日（土）～8月31日（月）
場所 千葉県立中央博物館

▼シンポジウム

「生物多様性保全研究の最前線」

7月11日（土）13：00～16：30

「里山里海サブグローバル生態系評価・

ふゆみずたんぼ報告」

7月18日（土）10：00～16：00

「生命のにぎわいとつながりを

世界の子どもの未来へ」

8月29日（土）10：00～16：00

▼生物多様性入門講演会

「生物多様性とは」

8月22日（土）13：30～14：30

▼生きもののにぎわい子ども発表会・コンサート

8月1日（土）13：00～16：30

※シンポジウム等への参加は無料。（企画展の入場は有料）
それぞれのシンポジウム等の定員は200名（当日先着順）

発行

編集

千葉県環境生活部自然保護課 生物多様性戦略推進室 生物多様性センター

〒260-0852 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043 (265) 3601 FAX 043 (265) 3615

URL：http://www.bdcchiba.jp/index.html